

[巻頭言]

人生100年時代、人はどう生き、 社会をどう再構築するか

敬愛大学総合地域研究所所長

藪内 正樹

人生100年時代は、健康、医療介護や生活資金ばかりでなく、働き方や学び方など、根本的に新しい人生プランが必要になる。人生二毛作とか学び直しという言葉も使われるようになった。千葉市内の専門学校では、60歳で入学し、修了後に再就職する人が増えているそうだ。

敬愛大学生涯学習センターは、2018年7月、シンポジウム「21世紀の生涯学習『人生100年時代』の新たな学びのかたち」を開催。基調講演をお願いした東京大学高齢社会総合研究機構副機構長で教育学の牧野篤教授は、少子高齢化が進み、AIが多くの業務を自動化すると、皆が同じ方向を向いて競争した高度成長時代とは違う生き方が必要と述べた。目指すは、個人が孤立せず、行政に依存せず、互いに支え合いながら自立し、価値を創造し続ける、皆が主役の「小さな社会」。そのために必要な学びは、人を目的とし、故郷を支える学力、論理的に話せ、異なる意見を受け入れ、自分の意見を主張できる能力、他者とともに生きる力。そうすれば、新たな価値と経済が創造できるとの主張に、大いに啓発された。

「小さな社会」とは、向こう三軒両隣を核とした地域、共通目的のために集うサークルなどが考えられる。そのつながりを通じて、新たな価値と経済が創造されれば、日本は、閉塞を打ち破ることができるだろう。

多くの日本企業は、史上最高益を出しながら、内部留保を増やすばかりで投資先を見出せないでいる。家計金融資産は、政府負債の1.5倍の規模を保ちながら1,859兆円に達した。そして純貯蓄の大半は高齢者が所有している。その高齢者が「小さな社会」の新たな価値と経済を創造する出資者となれるのではないか。種を蒔き、芽が出れば、企業は投資先を見出すことができる。

例えば、地域やサークルの人たちと、できれば多世代交流として、健康や文化や自然科学、人文科学をテーマとして、学びあったり行動したりしながら消費する。才能を見出せば奨学金を出し、さらに研究開発に出資する基金も作る。

本紀要に収録したシンポジウム「AIとロボットが作る未来社会と人材育成」では、千葉工業大学未来ロボット技術研究センター（fuRo）の古田貴之所長に基調講演をお願いした。古田所長は17人の天才たちとともに、世界最先端のセンサー技術や制御理論を駆使したAIロボットを研究開発している。古田所長が語るfuRoの目的は「アクティブシニアが経済活動、文化活動の主役となるための支援」であり、自身のゴールは「コミュニティの再生」と過去の記事で述べていた。

閉塞が続く中、思いは一つの方角へ収斂しつつあるのではないだろうか。